運動の進め方、組織のしかたⅡ

ア・ア・ボグダーノフとエス・イ・グセフへの手紙

１９０５年１１月１１日

きのう、あなた方の変更に同意するという電報をおくった。とはいえ、私は、あなた方の手紙から察知できることには、まったく同意ではなかったのだ。だが、こんなにぐずぐずしていることに私はあまりにもいやになったしあなた方の質問はあまりにも私にたいする嘲笑のようにひびいたので、私はいいようにさせておくことにしたのだ。つまり、せめてなにかやってくれさえすればよい、せめて**なんでもいいから**大会にかんする通知を出してくれさえすればよい、と考えたのだ！　だが、**出す**のであって、大会についてしゃべるのではない！　あなた方は、嘲笑という言葉に驚くであろう。だが、実際、考えてもくれたまえ。私は、二ヶ月もまえに自分の草案をビューローの全員におくっている〔全集、第七巻、五七七～五七九ページ〕。しかもだれひとりそれに関心を寄せず、意見を交換することが必要だとも考えていないのだ！！　ところがいまになって、電報で返事せよというのだ……なんとまあ、われわれは、組織がどうの、中央集権制がどうのと論じあっている、だが、実際には、中央部のもっとも緊密な同志たちのあいだに、つばでも吐きたくなるような離散状態と手工業性があるのである。ブンド派は、あのとおり、中央集権制についてだべりはしないが、彼らにあっては各人が毎週中央部に手紙を書きおくっており、結びつきが**実際に**確立されている。そして、この結びつきを知るには、彼らの『ポスレードェエ・イズヴェスチヤ』を手にとってみればよい。ところが、われわれのところでは『フペリョード』の第六号が出ようとしているが、編集局の一員（ラフメートフ）からは、『フペリョード』についても、『フペリョード』のためにも、ただの一行も書いてこない。われわれのところでは、サンクト・ペテルブルグにもモスクワにも豊富な文書上の結びつきがあるとか、多数派には若い勢力があるとかと「かたっている」が、ここにいるわれわれは仕事を呼びかけてから（『フペリョード』にかんする公告とそれについての手紙）**二ヶ月**もたっているのに、なんの音沙汰もきかない。また、ロシアの諸委員会（カフカーズ、ニジニ−ノヴゴロド。沿ヴォルガ地方や南部については言わないにしても）は、ビューローをまるっきり「神話」と考えており、またそう考える十分な権利をもっている。多数派のサンクト・ペテルブルグ委員会とメンシェヴィキの一グループとのなにかの同盟について、われわれは、よその人から「耳にした」が、自分の仲間からは一言も聞いていない。ボリシェヴィキがこのような自殺的な、ばかげた行動をなしうるということは、われわれには信じられない。社会民主主義者の協議会のことや、「ブロック」のことをよその人から「耳にした」が、自分の仲間からは、**一言も言ってこない**。それでも、これは fait accompli〔既成事実〕だと、人は言っている。たぶん、ボリシェヴィキは、もういちどだまされたくなったらしい。

われわれの唯一の力は、公然たる率直さと結束、急襲のエネルギーである。ところが、人々は、「革命」にさいしてふやけてしまったらしい！！　組織性が百倍も必要なときに、彼らは、組織攪乱者に身売りをしている。〔組織委員会結成〕宣言と大会〔召集の知らせ〕の草案にたいする修正（手紙ではきわめて不明瞭に叙述されている）から明らかなように、彼らは〔中央諸機関にたいする〕「忠誠」をかつぎまわっている。すなわち、パパージャ

は率直にこの言葉を書き、こうつけくわえている。もし中央機関の名をださないなら、だれひとり大会にはいかないであろう！　と。よし、諸君、私は賭けをしよう。もしあなた方が**そのよう**に行動するなら、あなた方はけっして大会をひらくことはできないであろうし、中央機関紙と中央委員会とのボナパルト主義者の尻のしたからけっして抜けでることができないであろう、と。中央諸機関に不信を表明し、それに反対して大会を召集しておきながら、**革命的**ビューロー（もし忠誠な規約のまえに平伏するのなら、存在しないところの、擬制の）の名において大会を召集しておきながら、〔中央委員会の〕九人のボナパルト主義者にも、連盟（アハハだ！）にも、ボナパルト主義者の手先（できたての諸委員会）にも、大会に出席する**無条件の**権利をみとめるということは、自分自身を笑いものにし、自分自身にたいするいっさいの尊敬の念を堀りくずすことを意味している。中央諸機関を招待してもさしつかえなかったし、また招待すべきであったが、彼らに議決権をみとめるということは、繰りかえしていうが、無分別である。もちろん、中央機関は、いずれにせよ、**われわれ**の大会には来ないであろう。だが、いったいなんのために、わざわざもう一度唾を吐きかけられる動機をあたえる必要があるのか？　なんのために偽善的にふるまい、身をかくすのか？　これは、まったく恥辱である。われわれは**分裂**を宣言した。われわれは**フペリョード派**の大会に人々を召集している。われわれは、**フペリョード**党を組織することをのぞみ、組織攪乱者との**ありとあらゆる**関係を断ちきる。ただちに断ちきる。――ところが、人々はわれわれにむかって忠誠を説き、『イスクラ』と『フペリョード』との共同の大会が可能であるかのようなふりをしている。なんという喜劇だ！　もちろん、大会（もしそれがひらかれるなら）の第一日、最初の一時間は、この喜劇を解消させてしまうだろうが、大会までにこのたぐいの嘘は、何十回、何百回となくわれわれに害をあたえるであろう。

もっとも、ボリシェヴイキの１０分の９はじっさい形式主義者であると、私はしばしば考えることがある。われわれは、戦いを欲するものを真に鉄のような組織に結束し、この小さいながらも強固な党をもって新イスクラ派の雑多な分子からなるもろい怪物を粉砕するか、さもなければ、われわれは軽蔑すべき形式主義者として滅亡に値いしたということを自分自身の振舞によって証拠だてるか、どちらかである。ビューローができる**以前に**、『フペリョード』がでる**以前に**われわれが、忠誠をすくうために、統一をすくうために、紛争解決の形式的な、すなわちより高い方法をすくうために、あらゆる手段をつくしたということを、なんと人々は理解していないことであろう！！？　だがいまは、ビューローができた**以後**は、『フペリョード』がでた**以後**は、分裂は事実である。そして、分裂が事実となったとき、われわれは**物質的には**〔新イスクラ派より〕**何倍も弱いということが**、明らかになった。われわれにとっては、まだこれからわれわれの精神的な力を物質的な力に転化させることが必要である。メンシェヴィキは、より多くの資金、より多くの文献、より多くの輸送手段、より多くの受任者、より多くの［名士］、より多くの協力者をもっている。このことをみとめないのは、ゆるしがたい子供っぽさであろう。そして、もしわれわれが、みのりのない道徳的純潔を誇りとする、ひからびた貧血症のオールドミスのもっともいとわしい見本を世間に見せたくなければ、われわれには戦争と軍事組織が必要であるということを、理解しなければならない。長い戦争をしてはじめて、りっぱな組織があるという条件のもとではじめて、われわれの精神的な力は物質的な力に転化しうるので

ある。

資金が必要だ。**ロンドンで**大会をひらく計画は愚の骨頂である。なぜなら、それは二倍も高くかかるだろうから。われわれは『フペリョード』を停めることはできない。ところが、長い留守はこれを停めるであろう。大会は、簡単で、短く、小人数でなければならない。これは、戦争を組織するための大会である。あなた方がこの点について幻想をいだいていることは、すべての点からみて明らかである。

『フペリョード』のために協力者が必要である。われわれは小人数である。ロシアから二、三人の常時協力者を追加しなければ、『イスクラ』との闘争についてたわごとをしゃべってもなんにもならない。小冊子とリーフレットが必要である、ぜひとも必要である。

若い力が必要である。私だったら、人がいないなどとあえて言うような人間をその場で銃殺するよう、率直に忠告するだろう。ロシアにはいくらでも人がいる。ただ、**青年をおそれることなく**、もっとひろく大胆に、もっと大胆にひろく、もう一度ひろく、もう一度大胆に、青年をつのることが必要である。ときは戦時である。青年が、学生や、それ以上に青年労働者が、闘争全体の結末を決定するであろう。遅鈍、地位の尊重、等々のあらゆる古い習慣をすてよ。青年からフペリョード派の**数百の**サークルをつくり、彼らをはげまして力いっぱい働かせよ。青年を採用して委員会を**三倍に**拡大し、５ないし１０の下級委員会をつくり、あらゆる誠実で精力的な人物を洩れなく「自主補完せよ」。どの下級委員会にも、どういう長たらしい手続もなしにリーフレットを書き出版する権利をあたえよ（誤りをやっても、たいしたことはない。われわれは『フペリョード』で「おだやかに」訂正するであろう）。すべての革命的創意に富む人々を、猛烈な速さで統合し、うごきださせなければならない。彼らの訓練不足をおそれるな。彼らの未経験と未熟についてびくびくするな。第一に、もしあなた方が彼らを組織し、つきうごかすことができなければ、彼らはメンシェヴィキやガポンのような連中のあとにしたがい、同じその未経験によって五倍も多くの害をあたえるであろう。第二に、いまでは諸事件がわれわれの精神でおしえるであろう。諸事件は、すでにほかならぬフペリョードの精神ですべての人々をおしえているのである。

ただ、通例の委員会的（位階制的）な、もったいぶった愚劣さをまったく背面におしのけて、**数百の**サークルをぜひとも組織し、組織し、さらに組織しなければならない。ときは戦時である。あらゆる種類の、あらゆる形態の、そしてあらゆる層のうちでの革命的な社会民主主義的活動のために、**新しい**、若い、新鮮な、精力的な軍事組織をいたるところにつくるか、それとも、あなた方は印章をもった「委員」の栄誉とともに滅亡するか、どちらかである。

私は、このことについて『フペリョード』〔本巻、204~214 ページ〕に書き、大会で述べるであろう。私が諸君にこの手紙を書くのは、意見の交換を呼びおこし、１０の**若い新鮮な**労働者サークル（およびその他のサークル）を編集局と**直接結びつけ**させるよう、いま一度**試みる**ためである。とはいえ……とはいえ、ないしょの話だが、これらのあつかましい願望が実現されるという期待を、私はすこしももっていないのだ。〔諸君は〕おそらく二ヶ月もたってから、これこれの「計画」変更に同意するかどうかを、電報でこたえるよう、私にたずねてくることであろう。……いっさいのことに同意する、とまえもってこたえておく。……大会でおあいしよう。レーニン。

追記。ロシアへの『フペリョード』の送付を革命化する任務を提起しなければならない。ペテルブルグからの予約申込のためにできるだけひろく宣伝せよ。学生とくに**労働者**に、自分自身の宛先で数十部数百部と注文するようにさせよ。こんにち、これをおそれるのは、わらうべきことである。警察はけっして全部を押収することはできないであろう。二分の一ないし三分の一はとどくであろうし、それだけでもすでに非常に多い。どの青年サークルにもこの考え（を―島田）おこさせよ。青年は、外国へ通ずる自分の道を数百となく見つけだすであろう。『フペリョード』に手紙をおくらせるために、もっとひろく、できるだけひろく、〔『』の〕宛先を知らせよ。

第八巻　ア・ア・ボグダーノフとエス・イ・グセフへの手紙　P135~140

一九二五年に雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』第四（三九）号にはじめて発表

手稿によって印刷

コメント

「われわれの唯一の力」である「公然たる率直さと結束、急襲のエネルギー」がないこと、フペリョード派を強化し、広く結集する努力をしないで「新イスクラ派」との妥協の道をさぐり、決められた道の実践をせず、「計画の作成」や「変更」を考えている国内の同志に苦情を言っている。

われわれにとっては、まだこれからわれわれの精神的な力を物質的な力に転化させることが必要である。そのためにわれわれには、戦争と軍事組織が必要であるということを、理解しなければならない。長い戦争をしてはじめて、りっぱな組織があるという条件のもとではじめて、われわれの精神的な力は物質的な力に転化しうるのである。

戦争を組織するため、『フペリョード』のための協力者が必要であり、小冊子とリーフレットを発行することが、ぜひとも必要である。

青年をおそれることなく、もっとひろく大胆に、もっと大胆にひろく、もう一度ひろく、もう一度大胆に、青年をつのることが必要である。ときは戦時である。青年が、学生や、それ以上に青年労働者が、闘争全体の結末を決定する。すべての革命的創意に富む人々を、猛烈な速さで統合し、うごぎださせなければならない。彼らの訓練不足をおそれるな。彼らの未経験と未熟についてびくびくするな。ときは戦時である。あらゆる種類の、あらゆる形態の、そしてあらゆる層のうちでの革命的な社会民主主義的活動のために、新しい、若い、新鮮な、精力的な軍事組織をいたるところにつくるひつようがある。